

記述言語学においてフィールドワークが必要となる条件

新永 悠人

1 フィールドワークの定義およびフィールドワークが必要となる条件

本研究プロジェクトの主眼は「フィールドワーク」が各調査者の研究にとってどのような役割を持つかを検討することである。しかし、何を「フィールドワーク」とみなすかは研究者ごとの異同があり得る。したがって、研究者間の用語の異同が明確となるように、本稿では「フィールドワーク」を「自ら物理的に現場に行つて調査すること」と定義し、それを行う者を「フィールドワーカー」と呼ぶことにする。これは、あくまで本稿の用語と他の研究者の用語との異同を明確にするためであつて、他の研究者の定義を否定するものではない。なお、「フィールドワーク」の定義に関する研究者間の違いを統合した考察としては、「はじめに」の葉山氏の考察（特に図1）を参照されたい。したがって、本稿の定義においては、自ら実践しない者（他者に任せる者）や、（自ら実践するけれども）物理的に現場に行かない者はフィールドワーカーに含まれない。フィールドワークの定義に敢えて「物理的」という文言を含めたのは、インターネットを介したオンライン調査が現実的になった現代の状況において、物理的に現場に行くことの必要性の有無を焦点に据えるためである。

研究者がフィールドワークをする理由は「自ら物理的に現場に行くことよつてのみ手に入る一次情報が存在するから」である。ここで

言う「現場」とは「一次情報を持つ調査対象が物理的・慣習的に存在する場所」を指す。したがって、非慣習的（つまり人為的）に当該対象を持ち込んだ場所はフィールドワークの「現場」ではない。ちなみに、調査地の公民館に来てもらつて調査する場合などは、話者の自宅や仕事を訪ねて調査する場合に比べると現場性が相対的に薄れると考える。ここで言う「一次情報」とは「目的とする調査対象に関して他者の解釈・分析・整理を経っていない情報」を指す。また、そのような「一次情報を持つ調査対象」とは、本稿では「物理的な実体」を持つものを指す。具体的には人間と人間以外を指し、後者はさらに（ヒト以外の）生物と無生物に分けられる。

以上を踏まえると、フィールドワークが必要不可欠となるのは以下の二つの条件を満たす場合である。

(1) フィールドワークが必要不可欠となる二つの条件

- a 自分でやる必要がある
- b 物理的に現場に行く必要がある

上記の両方の条件を満たす場合にのみ、フィールドワークが必要不可欠となる。もし一方の条件が当てはまらないのであれば、必ずしもフィールドワークをする必要はない。以下では、私自身の専門である

記述言語学という分野が上記二つの条件とどう関わるのかについて考察する。まず二節で「自分でやる必要がある」かどうかを考察し、三節で「物理的に現場に行く必要がある」かどうかを考察する。四節でインターネットを介した調査の可能性と限界について考察し、五節で言語学と他分野のフィールドワークの共通点と相違点を考察する。最後の六節で全体をまとめる。

2. 自分でやる必要があるかどうか

一節の(1a)「自分でやる必要がある」かどうかについて考えるために、自身の専門である記述言語学について簡単に説明する。

まず、言語学とは人間の話す言語の仕組み(「文法」)を研究する学問である。記述言語学とはその言語学の中の一つの研究流派であり、未だほぼ記述されていない言語・方言の総合的文法書を書くことを目的としている。総合的文法書とは、当該言語・方言の表出形式(音声言語であれば発音、手話であれば手や顔を用いた動き)の仕組み、単語の作り方、文の作り方、文を超えた文脈や発話場面の意味などを総合的に記述した書物を指す。簡単に言えば、それを読めばその言語・方言がそれなりにカタコトで話せてしまえる、そのような書物を作ることが記述言語学の目的である(記述言語学のフィールドワークの詳細に関しては、下地(二〇一〇)、下地(二〇一一)が大変参考になる)。世界には七千以上の言語があるとされており(Ethnologue 2023)、さらにそれらの言語の方言まで含めるとその数は数万を超える。そして、

それらの中で記述文法書が書かれているのは数百程度である。

ここで、具体的な調査のひとコマをお伝えしよう。私が奄美大島という鹿児島県の離島の湯湾ゆわんという集落で調査をしている際、その方の一人称代名詞(日本語共通語で言えば、「わたし」や「わたしたち」)の形式を調べることにした。すると、「わたし」はワン(ちなみに、世界中の言語学者に共有されている「国際音声字母」と呼ばれる万能発音記号で書くと「wan」と言い、「わたしたち」はワーキヤ[wɔ:kjɑ]と発音するのだと分かった。ここまでは順調である。しかし、なにげなく会話を聞いていると、なにやらそれらとは違うワツテェー[watɕi:]という単語が「わたしたち」のような意味で使われていることが分かってきた。私が調査に行った時点ではそのような単語は付近の方言でもまったく報告されていないようにだったので、謎は深まるばかりである。そこでよくよく話を聞いてみるうちに気づいたのは、ワツテェーという単語は、「わたし」ともう一人をまとめて表すとき(つまり、「わたしたち二人」という意味のとき)にだけ使われるということである。したがって、「わたしと花子」の場合にはワツテェーが使えるけれども、「私と花子と太郎」の際はワツテェーを使うことはできず、必ずワーキヤを使わなければならない。全体で二人なのか、それとも三人以上なのかという区別が重要な方言なのである。実は、このような数の区別を呼び分ける用語(概念)が言語学には存在する。そして、その一部は実はみなさんも既にご存知である。そう、「単数形」と「複数形」である。英語の文法について、Iは(一人称の)単数形、weは(一人称の)複数形と習ったはずである。日本語共通語でも同様に、「わたし」は単数形、「わたしたち」は複数形である。す

ると、先ほどの奄美大島の湯湾集落で話されている方言でも、ワンは単数形、ワーキヤは複数形であると言える。問題はワツテエである。このように、二人からなる集合を指す場合にだけ使われる形式を言語学では「双数形^{ちうすうけい}」と呼ぶ。つまり、ワツテエは双数形なのだ。ちなみに、このような単数形・双数形・複数形の区別は世界的に見たらそれほど珍しくはない。ハワイ語やマオリ語、あるいはアラビア語などでもこのような区別を持つ代名詞が報告されている。ちなみに、先ほど「付近の方言でもまったく報告されていないようだった」と書いたが、実はその後の研究を進める過程で、一人だけ既に奄美方言の双数形を正確に報告している研究者の文献（山田 一九八一）が見つかった。自分で現象をちゃんと理解した後だと、「あ、ここに書いてあった!」というように先行研究の中の記述に気づくことができるのだが、まさかそんな現象があると思っていないときには、なかなかそこに目が行かないということはよくある。

さて、そのような記述言語学の調査をする場合、フィールドワークの目的となる一次情報は言語そのものである。研究対象となる言語は未だほぼ記述されていない言語・方言（いわゆる「少数言語」）であるため、他の研究者によって集められたデータは非常に少ない。そして、他の研究者によって集められたデータが非常に少ないということは、そもそも自分で行かないとデータが集められないということである。あるいは、他者に謝金を払ってデータを集めてきてもらうという方法も考えられるが、記述言語学の調査は言語学上の知識・技術（音声学の基礎知識や文法項目に関する理解）が必要であり、そのうえで当該言語の知識を蓄え、洗練させる必要があるため、他者に任せるこ

とがほぼ不可能である。ただし、文法に関する調査ではなく、単語の発音、あるいは二人以上の会話を録音するだけのような作業であれば、（調査協力者への十分な説明と理解があれば）可能である場合もある（詳しくは四節を参照）。

したがって、記述言語学の調査は「自分でやる必要がある」。

3 物理的に現場に行く必要があるかどうか

記述言語学において、物理的に現場に行く必要があるかどうかを考えるにあたり、まずは言語学全般において、どのようにして言語データを入手するかを説明する。

言語学において、必要となる言語の一次データを入手する方法は以下の三つに分かれる（新永 二〇二〇…三六）。

(2) 言語の一次データの入手方法

- a 文献調査法：当該言語で書かれた文献を調査する
- b 通信調査法：郵便やウェブページを介したアンケートによる間接的な調査
- c 対面調査法：話者と対面する直接的な調査

私は琉球列島で話されている方言を専門に研究している。琉球諸方言を含む多くの少数言語・方言は書き言葉として使用されることがない（代わりに、その地域の大言語・標準語を書き言葉として使用する）。

したがって、その方言で書かれた文献が存在しない以上、(2a)の文献調査法は不可能である。

次に、(2b)の通信調査法の場合であるが、郵便やウェブページを利用したアンケートは口頭で調査内容を補うことができないため、質問項目がシンプルで限定された内容にならない(例えば、「共通語の「とんぼ」や「かたぐるま」などの単語や、「東京へ行く」などの短い文を方言で訳してもらうなど)。したがって、総合的の文法書を書くには通信調査は限界がある。

したがって、総合的の文法書を書くには(2c)の対面調査法を行う必要がある。それでは、「物理的に現場に行く」こと無しに対面調査を行うことは可能だろうか？ 結論から言えば、インターネットによる音声・映像の同時・双方向のコミュニケーションを可能にする技術(例えば、オンライン会議アプリのZoomなど)、すなわちオンラインコミュニケーションツールを利用すれば、「物理的に」現場に行かずとも、対面調査が可能となる。ただし、ここで問題となることが二つある。それは、①どうやって話者を見つけるか、②話者がそのような通信アプリを使えるかどうかである。

まず①の「どうやって話者を見つけるか」であるが、少なくとも私の調査地では、現場に行くことなく(電話やインターネットを介して)、オンライン調査に応じてくれる話者を探すことは現実的ではない。教育委員会などを通して予め現地の話者候補に連絡をとることはあるが、その場合も現場に行つたうえで調査することが前提である。次に、②の「話者がそのような通信アプリを使えるかどうか」である。

もし最初に物理的に現地に行き、話者との関係が築けたうえで、その

話者がインターネットを用いた通信技術を使えるならば、それを介した対面調査は可能である。しかし、私の調査地の方言(鹿児島県の奄美大島の湯湾方言と沖縄県の久高島方言)はいわゆる「危機方言」(消滅の危機に瀕した方言)であり、若年層への継承がなされていない方言、言い換えれば、高齢層のみが話せる方言である。そして、そのような高齢層の話者が上記のようなオンライン会議アプリを使いこなすことは、少なくとも私の調査地ではほぼ考えられない。さらには、それを恒常的に助けしてくれる人を見つけることも困難であり、一時的に可能であっても、そのような不慣れた状況での発話は物理的に対面した場合の自然さに著しく劣ることが予想される。

したがって、少なくとも私の調査地に関しては「物理的に現場に行く必要がある」。

4 オンラインコミュニケーションツールを介した対面調査の可能性と限界

三節で述べたように、琉球諸方言のような危機方言の調査では、基本的に物理的に現場に行く必要がある。しかし、仮に、話者の年代が若かったり、高齢層であっても通信機器やアプリを使いこなす技術に長けている人がいたり、あるいはそれを助ける別の人が存在すれば、「物理的に」現場に行かずとも、対面調査が可能となることは確かである。

そこで考えるべきことは、そのようなオンラインコミュニケーションツールを介した対面調査によって得られる一次情報が「自ら物理

的に現場に行くことよってのみ手に入る「一次情報」とどのような点で共通しており、どのような点で違いがあるかということである。そこでまず、言語学における対面調査をもう少し詳しく見て行こう。それには、以下の三つの下位区分がある（新永 二〇二〇…三六一―三八）¹⁾。

(3) 対面調査法の三つの下位区分

- a 質問票調査：質問票を用いたインタビュー調査
- b 自然傍受法：質問票を準備せず話者のそばに居て世間話をしながらのデータ収集
- c 自然談話のデータ分析：自然談話を録音・録画したうえで書き起こす

上記の三つは「話者の発話の自発性（自然性）」と「調査の網羅性」において相互補完的な関係にあり、(3a)の質問票調査は、こちらが質問して話者に答えてもらうスタイルであるため、話者の発話の自発性（自然性）は低い、こちらの知りたいことを網羅的に調べることができるため調査の網羅性は高い。一方、(c)の自然談話のデータ分析では（場合によっては調査者は同席せずに）話者に自由に話してもらった内容を書き起こすため、話者の発話の自発性（自然性）は高くなるが、必ずしもこちらの知りたい語彙や文法項目を含んだ発話がなされるわけではないので、調査の網羅性は低くなる。(3b)の自然傍受法は世間話をしながら気になることを話者に尋ねるスタイルであるため、自然性と網羅性に関しては(3a)と(3c)の中間程

度と言える。以上を踏まえたうえで、(3a)から(3c)について、オンラインコミュニケーションツールを介した対面調査にできることとできないことを考察する。

まず、(3a)の質問票調査であるが、音声に関する調査の場合はオンラインの調査が難しい場合がある。例えば、器械音声学的調査（音声波形などの分析を行う調査）の場合は高音質のデータを入手することが必要なのだが、録音環境を静謐にもらうのが難しい場合や、通信アプリでは音質が低下するなどの問題が生じる。また、静的パラトグラフィ（口腔内に塗った墨の付き方で舌の動きを把握する調査）などはそもそも現地に行かないと実行困難である。さらに、通信機器を経た発音では、こちらの発音が相手に届きにくく、相手の声もこちらで聞き取りにくいという問題がある。これは、音声に関する調査に限らず、文法に関する調査でも生じる問題である。相手が高齢者の場合、加齢による自然な聴力の衰えがあるため、この問題は特に大きい。

さらに、そもその前提であるが、質問票調査をするならば、予め質問する内容が決まっていなければならない。この点、記述言語学における調査は、まだほとんど誰も調査していない言語・方言を研究対象とする以上、何を質問すれば良いかが予め決まっていなければならない。調査をしながら質問事項を見つけて行く必要がある。言い換えれば、記述言語学は「仮説生成型」の調査を行う学問分野である（参考…小熊 二〇二二…一八〇―一八七）。特に、記述言語学では当該言語の全体像を把握しようとするため、調査を進める過程で次々に疑問が生まれ、それを話者に尋ね、また新たな疑問が生まれ、さらに尋ねるといった過程を頻繁に繰り返す。そのため、少なくとも私の調査地の場合は、質

問が浮かぶたびに話者に都合を伺い、話者の時間が空いて入れれば随時質問に行くというスタイルを取っている。経験上、物理的に対面しているからこそ対応してもらえるが、電話やインターネットを介した対面調査でここまで対応してもらえる可能性はかなり低い。

次に、(3b)の自然傍受法であるが、これは相手が友人や家族などと自然に会話している傍らにいながら耳を傾ける調査である。したがって、オンライン上で相手がそのような会話をしている状況が既に存在するか、調査者自らそのような状況を作ることができ、そのどちらかに参加することが許されるならば、オンラインでの自然傍受法は可能と言える。自然傍受法は、現実において話者が自然に用いる表現を同時に経験し、必要があれば質問をすることで自らの理解を深める。この経験が長いほど正しいインプットの量が増えるとともに、質問によって間違った表現を把握することができ、結果として「ネイティブならおそらくこう言うだろう」という感覚が身について行く。したがって、この感覚を身につけるためには、様々な場面において実際の発話を聞く必要がある。先のオンライン上での自然傍受法は、この「様々な場面」という条件を満たすことが、物理的に対面する場合に比べると制限される。

最後に、(3c)の自然談話のデータ分析について考察する。自然談話のデータ分析は、自然談話を録音・録画する過程と、それを書き起こす過程に分かれている。前者の録音・録画の過程であれば、自然傍受法の場合と同様に、オンライン上で自然談話をする状況を準備することができ、その録音または録画を許可してもらえるならば、収録は可能である。ただし、自然談話の録音データは、複数人が同時に話

すことで発話が被った場合に各人の発話をあとから正確に聞き取り、書き起こせる必要がある。しかし、Zoomなどのオンラインコミュニケーションツールの場合に、話者ごとの発話を別々の音声ファイルとして保存する方法があるのか不明である。もしそれができないならば、物理的に現場で録音する方が優れている。なぜなら、現場では話者ごとにヘッドセットマイク（あるいはピンマイク）を付け、各人の発話を個別の音声ファイルで記録できる録音機（例えば、オンライン会議アプリと同名であるがまったく別の会社が作った高性能録音機であるZoomなど）を使うことで、話者ごとの発話を正確に書き起こせる録音が可能となるからである。ちなみに、このような自然談話の録音を現場で遂行してくれる調査協力者が居れば、自ら現場に行く必要はない。しかし複数人の都合を合わせて、なるべく雑音の無い環境で、上記のような録音機器を準備して録音をするというのはかなり骨が折れる作業であり、そのような作業を引き受けてくれる調査協力者を見つけることは（少なくとも私の調査地では）簡単なことではない。

一方、自然談話を書き起こす過程については、相手がオンライン通信機器を使いこなす力があるのであれば、録音データを聞かせながら（または録画データを見せながら）オンライン上で書き起こしを行うことは可能である。

以上をまとめると、以下のようになる。

(4) オンラインコミュニケーションツールを介した対面調査では

困難なこと

a 一部の音声学に関する調査

- b 高齢者（特に聴力に衰えがある方）への調査
- c 短い間隔で仮説生成と質問を繰り返す調査
- d 現場の様々な場面での発話のデータを得ること
- e 会話において話者別の音声ファイルで録音すること

上記の五点は、オンラインコミュニケーションを介した対面調査では実現できないことである。これらの実現には、調査者が現場に物理的に行く必要がある（ただし、(4e)は現地の調査協力者が見つければ、オンラインコミュニケーション以外の方法を用いて実行可能である）。

総合的文法書の作成を目的とする記述言語学では対面調査をする必要があることは既に述べた（三節）。そのうえで、オンラインコミュニケーションツールを介した対面調査では実現困難な(4c-d)は、総合的文法書の記述には必要不可欠である。なぜなら、未だほとんど調査されていない言語とは調査開始時にはカオス（混沌）であり、短い間隔で仮説生成と質問（検証）を繰り返すことでその中に規則性を見出すことができるものであり、その中で「ネイティブならおそらくこう言うだろう」という感覚を身につけるためには現場の様々な場面での発話データに身を浸すことが必要不可欠だからである。

さらに、私の調査地においては、話者が高齢であり、現地の調査協力者を得ることが難しいこともあるため、(4b, e)という点においても物理的に現地に行く必要がある。

5 他分野のフィールドワークとの関係

本研究プロジェクトは「研究におけるフィールド調査の重要性に関する多分野横断型研究」である。重要な点は、各自の専門分野におけるフィールドワークの重要性を指摘するだけではなく、それが他の領域とどのような共通点・相違点を持つかを考察するという点にある。そこで最後に、本稿が対象とした言語学におけるフィールドワークと、他分野におけるフィールドワークの共通点・相違点を考察することにした。

まず共通点となり得ることとして挙げられるのは、言語学も他分野の研究も、(1a)自分でやる必要がある、または、(1b)物理的に現場に行く必要があるのであれば、フィールドワークが必要不可欠となる点が挙げられる。言い換えれば、他者に依頼できず、インターネットなどを介して一次情報を入力できないのであれば、自ら物理的に現場に行つて調査するしかない。

次に実際の共通点として挙げられるのは、一次情報を持つ調査対象に人間が含まれる点である。ただし、それが主要な調査対象であるかどうかは分野ごとに異なる。主要な調査対象が人間である場合、調査対象が言語を話すという点に大きな特徴がある。たとえば、人類学、社会学、民俗学、経営学などは、言語学と同様に、人間に対し質問し、その回答を得るというプロセスが一次情報取得の主要な位置を占める。一方、主要な調査対象が人間ではない場合は、対象自体に問うことで情報を得ることはできない。たとえば、美術史、人文地理学、博物館学などは、人間（具体的には、美術品の所有者、漁師、展示物の

所有者など)とのコミュニケーションが必要ではあるけれども、主要な調査対象はモノ自体(具体的には仏像、漁船・風、展示物)であるため、それらに対して言語を用いた調査をすることはできない。したがって、言語以外の手段で調査対象(モノ)から情報を取得する必要がある。

ここで、主要な研究対象が人間である研究(言語学、人類学、社会学、民俗学、経営学)に注目したい。なぜなら、人間に対し質問し調査するというプロセスは同じであっても、言語学とそれ以外の研究分野においては一つの大きな違いがあると思うためである。それは、「言葉」(あるいは「言語」という用語の使われ方である。例えば、本プロジェクトでは会議の際に、「社会学・人類学・民俗学の研究者がしばしば「言葉だけに注目してはダメだ」と発言することがあった。これは「調査協力者が話したことだけを鵜呑みにせずに、周囲の人や道具、建造物、実際の生活での行動など、周囲の環境に幅広く関心を向けて、その発言の文脈を正確に理解しなければならない」ということを意味している(と私は理解した)。

一方、言語学の研究においては、まずは言葉そのものに注目する必要がある。たとえば、2節で述べたように、「わたしたち」を表す単語に双数形と複数形の区別があるかどうかが重要な意味を持つ。なぜなら、言語学の究極の目標は、人間の言語の仕組みがどのようなバリエーションを持つかを知ることにあるからである。簡単に言えば、(あらゆる言語を視野に入れたうえで)人間であるわれわれはどんな言い方は可能で、どんな言い方が不可能なのか、それが知りたいのである。ただし、厳密には以下の二つの場合には「言葉以外の現象」にも関心

を向ける必要がある。一つは、(文法ではなく)語彙の研究をする場合である。名詞(たとえば、虫の名前)や動詞(たとえば、北海道・東北などの方言で「器にこびりついた米粒などを水でふやかす」という意味の「うるかす」など)の意味を知るためには、実際の虫や動詞の指す行為そのものに注意を向ける必要がある。二つ目は、視線や体の向き、呼吸の間合いなどのように言語の「メッセージを伝える道具」としての側面に強い関りのある(しかし、それ自身は言語ではない)現象の研究をする場合である。

いずれにしろ、言語の「文法」は「語彙」とは違って、言語学の方論に慣れていなければ意識を向けることが非常に難しい領域である。だからこそ、言語学はその領域(文法)に特に注意を向け、それ(人間の言語に内在する仕組み)を明らかにすることを目指している。必然的に、言語学で言う「言葉」(言語)の指す主な内容は、人類学などで用いられる「言葉」の指す内容とは違った意味を持つことになる。前者は「言葉の仕組み」である文法を指すのに対し、後者は「言葉を用いて伝える情報」を指している。各分野の研究にとって不可欠な用語の意味の違いを自覚しておくことは、分野横断的な相互理解、および建設的な議論を進めるうえで重要である。

6 まとめ

本稿ではフィールドワークを「自ら物理的に現場に行って調査すること」と定義した。したがって、「自ら行く」または「物理的に現場

に行く」を同時に満たす場合にフィールドワークをする必要があると言える。そこで、私の専門である記述言語学の研究はこの二点を同時に満たすかどうかを考えた。すると、未だほとんど研究されていない言語・方言に対して専門的な知識・技術を用いて調査するという点において「自ら行く」必要があり、オンライン調査だと「短い間隔で仮説生成と質問を繰り返す調査」も「現場の様々な場面での発話のデータを得ること」などできないことから「物理的に現場に行く」必要があることが分かった。したがって、記述言語学においてはフィールドワークが必要不可欠であると言える。さらに、私の調査地においては話者（調査対象）が高齢であることもあり、そもそもオンライン調査が実現不可能であるという点も、フィールドワークが必要不可欠である理由と言えた。

言語学のフィールドワークと他分野のフィールドワークを比較した場合、本プロジェクトメンバー全体に共通するのは一次情報を持つ調査対象に人間が含まれる点である。ただし、それが主要な調査対象であるかどうかは分野ごとに異なる。そして、人間が主要な調査対象であっても、同じ用語（「言葉」）が指す意味内容が異なることを自覚することは、分野横断的な議論をするうえで重要であることを指摘した。

註

1 社会学の用語（概念）を用いるのであれば、(3a)の「質問票調査」は「構

造化インタビュー（またはフォーマルインタビュー）」、(3b)の「自然傍受法」は「非構造化インタビュー（またはインフォーマルインタビュー）」に相当する（参考…佐藤 二〇〇六「一九九二」…一九二―一九五）。

2 下地理則氏（記述言語学の専門家）も「フィールドワークをはじめた頃はその言語の何を調査してよいかまだわからない…（中略）まず対象としている言語の具体的な姿を眺めてみなければ、何も始まらないのである」（下地理 二〇一―四八）と述べている。

参考文献

小熊英二（二〇二二）『基礎からわかる論文の書き方』講談社。

佐藤郁哉（二〇〇六「一九九二」）『フィールドワーク 増訂版』書を
持って町へ出よう』新曜社。

下地理則（二〇一〇）「フィールドワークに出かけよう・琉球諸語の
フィールド言語学」『日本語学』二九―二二、一六―三〇。

下地理則（二〇一）「文法記述におけるテキストの重要性」『日本語
学』三〇―六、四六―五九。

新永悠人（二〇二〇）「方言研究の類型論」『弘前大学国語国文学』
四三、五〇―六八。

山田実（一九八二）『奄美与論方言の体言の語法』第一書房。

参照ウェブサイト

Ethnologue 2023 (<https://www.ethnologue.com/>)